

【記録】インタビュー 2015年4月27日（月）15:00～

於：東京大学

○渡邊 雄一郎 氏 東京大学大学院総合文化研究科・教授

研究分野：遺伝子発現制御からみた植物の姿、小分子 RNA による  
生物現象の多様性創成、環境ストレスと植物の成長など

### ○訪問の目的

1. NBT の諸展開に関する見解
2. リスクコミュニケーションやその能力に関する  
苦言・提言



### <NBT（遺伝子組換え技術を含む新しい育種技術）についての私の考え>

NBT について、あるいは CRISPR-Cas9 に関しても論文では読んでいますが、研究室として取組んでいる話ではありません。その前のジンクフィンガーについては多少研究していましたが、あくまでも理学系の基礎研究として、ある植物のある遺伝子だけ変化したとき何が起こるかを知りたいという、基本に帰った問いに答えるためにでてきた技術として期待して少し取組んでいました。私たちは基礎研究を中心に考えているので、原理的にはその通りいくと思っていますが、人間が普段食べている農作物に対してこれらの技術を使うことには、私自身としては距離をおいて、判断は個々の人の判断に任せる立場です。

NBT についてはさまざまな考え方があるとは思いますが。原理的にはもとの植物の遺伝子にキズを残さない、特定の部分だけをピンポイントで変えて他の部分には影響ないものを作るという謳い文句ですし、限りなく可能性がある技術だろうと思います。ただそれで遺伝子組み換えの作物でないという主張は、本当の意味で良いのかということに私個人的には抵抗があります。

### <リスクコミュニケーションへの思い>

普通に歩いてもいつ事故に遭うかはわからない訳で、人間が生きてる間は絶対にゼロリスクはなく、そういった意味では相対的なリスクの比較をしていると思うんですね。ところが、今の状況を考えると問題を安全か安全でないかという一点に絞った議論が多いと感じています。私たちはどこかで比較する技術を複数持っているので、絶対的な安全か安全でないかという表現はできないと思います。柔軟な考えが必要だと思います。何か科学に対して絶対的な価値を決めてくれるような期待が持たれがちですが、科学というものは選択肢を与えているのに過ぎません。科学は神様ではないのです。